

無住撰『沙石集』の構想

小林 靖典

はじめに

智山伝法院では、平成十二年度から「仏教と咒術」というテーマを掲げて総合研究をすすめてきた。そこで宗学研究室では、祈禱が行われ咒術が行使される場において、そこに何らかの利益なり功德が期待されていることに着目し、「利益・功德」にテーマを絞って討議を行ってきた。その中で明らかになったことの二つは、仏（聖）と行者（凡）、僧侶（出家者）と施主（在家者）などの二者の間において、祈禱や呪術が行使される場で期待され求められている利益や功德をめぐって、そこに何らかの問題を孕んでいるということであった。

すなわち、密教における祈禱は、即身成仏を第一義の目的として修せられるものであるが、ただ、その祈禱は、当相即道・即事而真ということに基づいているため、そこに現世の祈り、たとえば病氣平癒・安産を祈るといった、いわゆる現世利益も排除されることなく必然的に包含されて⁽¹⁾おり、それ故、施主の依頼により祈禱が行われる際、密教僧の理想とする結果と、施主の要求する結果とが、大きく懸け離れたものとなってしまいう事態を招く

こともあろうし、また、僧侶が祈祷や説法に臨むときの態度が、名利・名聞、財を求める結果、安易に施主・世俗に迎合してしまふといった問題が起こりがちである。そしてこれらのことは、体系的な密教が弘法大師空海によつて伝えられてから現在に至るまで、無くなり変ることのない問題として内在し続けていると思われる。

そこで本稿では、鎌倉期の密教僧である一円房無住（一二二六—一三一二）の主著である『沙石集』一〇巻を取り上げて、祈祷や説法の場合において、無住はどのような態度で民衆に臨んでいたのか、また、どのように臨むべきであると考えていたのかを見ていくことにしたい。

一、無住と『沙石集』

では何故、無住なのか、何故『沙石集』を取りあげるのかであるが、先ず、無住という一人の僧を見たとき、無住は後宇多帝の詔によつて、師僧である円爾の遷化にともない京都東福寺の第二世の住持に招かれながらも、これを固辞し、尾張の長母寺という貧寺に住し、そこで民衆に対して仏教を広めたことによつて、無住が民衆と共に歩んだ僧であつたということ、また、その主著である『沙石集』を取りあげたのは、本書が一般的に仏教説話集にジャンルされているということによる。すなわち、仏教説話というものは、主に人々の間で口頭などで伝承された宗教的ことがらを記したものであり、そしてそれが人々の生活の中で重要な意味を持った物語であるという性格を持っているということから、当時の民衆の間にあつた信仰・意識といったものが、説話に包摂されていると思われるからである。その上この『沙石集』は、ただ単に説話を収集し、それを分類しただけではなく、その半分ほどを無住自身による論説が加えられているので、そこに無住の意図するものが看取れると考えたからである。

これらのことを言い換えるならば、人々の間、民衆の間で語り継がれた宗教的物語を、或る僧侶が或る意図をもって編集し、改めてそれを民衆に向けて説示しなおしたのが、外でもない無住であり、この『沙石集』という仏教説話集であったということが、無住と『沙石集』を取りあげる大きな理由である。

さらに理由を付け加えるならば、筆者が研究対象としている中性院頼瑜（一二二六～一三〇四）とこの無住（一二二六～一三二二）との時代が全く重なりあっているということ。また、頼瑜は『真俗雜記問答鈔』の中で和歌を記しているのであるが、無住もまた和歌を好み、『沙石集』の中で「和歌即陀羅尼」の思想を展開している。これらのことによつて、筆者自身の頼瑜の研究に、何らかの形で反映できるのではないかと、淡い期待を保持していたからである。

二、『沙石集』執筆の動機

『沙石集』一〇巻は、その最後に記された識語によれば、

于時弘安六年中秋。

此物語書始シ事ハ、弘安二年也。其後ウチヲキテ、空ク両三年ヲヘテ、今年書キツギ畢ヌ。仍テ前後ノ言語、不同之レ在。後人ノ不審ノ為、之ヲ記ス所也。

（渡辺綱也校注「日本古典文学大系」⁽³⁾第八五巻、四六一～四六二頁）

とあるように、無住が五十四歳の弘安二年（一二七九）に起稿し、三年間の中断を挟んだ後、弘安六年（一二八三）に脱稿したことが知られるが、先学たちの研究により、恐らく一時中断するまでに第一巻から第五巻が成立し、中断後に第六巻以後が執筆されたと考えられている⁽⁴⁾。また本書はその後、無住八十三歳の徳治三年（一三〇

八)までの間、幾度となく補筆を繰り返したことが知られているが、補筆されていたのは、ほとんど第六卷以降の巻であることが、現存する諸写本の比較によって明らかになっている。⁽⁵⁾

そこで、本書の執筆動機はといえば、次の本書の序によって明らかである。それを示せば、

夫、僞言軟語ミナ第一義ニ歸シ、治生産業シカシナガラ實相ニ背ズ。然レバ狂言綺語ノアダナルタハブレヲ縁トシテ、仏乗ノ妙ナル道ニ入シメ、世間淺近ノ賤キ事ヲ譬トシテ、勝義ノ深キ理ヲ知シメント思フ。——中略——夫道ニ入方便一ツニ非ズ。悟ヲ開ク因縁是レ多シ。其大キナル意ヲ知レバ、諸教義異ナラズ。修スレバ万行旨ミナ同キ者哉。此故ニ、雑談ノ次ニ教門ヲ引、戲論ノ中ニ解行ヲ示ス。是ヲ見ン人、拙キ語ヲ欺カズシテ、法義ヲ悟リ、ウカレタル事ヲタダサズシテ因果ヲ辨へ、生死ノ郷ヲ出ル媒トシ、涅槃ノ都ニ至ルシルベトセヨトナリ。是則愚老ガ志ナリ。

(大系本、五七—五八頁)

というものであり、その執筆の動機・目的は、「僞言軟語」「狂言綺語ノアダナルタハブレ」「世間淺近ノ賤キ事」に同置される近來の説話・出来事を方便・縁として、「第一義」「仏乗ノ妙ナル道」「勝義ノ深キ理」へと人々を導こうというものである。そしてその執筆態度は、「夫道ニ入方便一ツニ非ズ。悟ヲ開ク因縁是レ多シ。其大キナル意ヲ知レバ、諸教義異ナラズ。修スレバ万行旨ミナ同キ者哉」の文にて解るようになり、或る特定の宗や教義だけに偏らず、覚りの境界へ向わしめ、そこへ導くものならば、その全てを肯定するというものであり、それは、全一〇巻の最初から最後に至るまで決して変ることなく、このような執筆態度によって、貫かれているのである。

三、『沙石集』の概要

次に各巻の内容⁽⁶⁾、特に第一巻から第五巻に限って概観しておくことにする。何故なら、この前五巻は、本書の中核を形成する部分であり、ここを理解することによって、無住の思想と本書の構想が、ほぼ把握できると考えるからである。

(一) 第一巻〈本地垂迹〉

この第一巻は、鎌倉期に起こってきた「本地垂迹説」に基づいて、神明もまた、仏の本意に契う存在であるから、決して軽々しく扱ってはならないことを説き明かしている。すなわち、第一巻の第一条「太神宮御事」に、

然レバ本地垂迹ソノ御形異ナレドモ、其意カワラジカシ。漢朝ニハ、仏法ヲ弘ム為ニ、儒童・迦葉・定光ノ三人ノ菩薩、孔子・老子・顔回トテ、先外典ヲ以テ人ノ心ヲ和ゲテ、後ニ仏法ヲ流布セシカバ、人皆是ヲ信ジキ。我朝ニハ、和光(ノ)神明マツ跡ヲ垂テ、人ノ荒キ心ヲ和ゲテ、仏法ヲ信ズル方便トシタマヘリ。

本地ノ深キ利益ヲ仰テ、和光ノ近キ方便ヲ信ゼバ、現生ニハ息災安穩ノ望ヲ解、当来ニハ無為常住ノ悟ヲ開クベシ。我国ニ生ヲ受人、尤此意ヲ辨フベキヤヤ。
(大系本、六一頁)

として、仏と神明とは一見その形相は異なっているが、人を覚りの境界へと導く存在であることに関して、両者は何等異なることがない。そして無住は、印度・中国・日本という空間的差異、また日本における仏法弘通以前・以後という時間的差異を見かけ上の差異であるとし、本質的には空間的・時間的差異を差異とせず、同一視することができうるといふ無住独自の考えにより、仏と神明との本地垂迹説を宣説するのである。しかし一方で、

神明と仏とに対する信仰態度については、

我国ノ、仏法ノ名字モ聞ズ、因果ノ道理モ知ラザリシ時、仏ニ仕ヘ法ヲ行ズベキ方便ニ、祭トイフ事ヲ教テ、漸ク仏法ノ方便トシ給ケル。本地ノ御心ヲ伺ヒ、仏法ノ教ヒロマリナバ、昔ノワザヲ捨テ、法味ヲ捧ンコソ、眞実ニ神慮ニモ叶ベキニ、人ノ心ハ、フルクシナレシワザヲバ捨ガタク、思ヒソミヌル事ヲバ忘レ難キ儘ニ、物ヲイミ、祭りヲ重シテ、法味ヲ奉ル事スクナキハ、返々モ愚ニコソ。和光ノ面モ、ナラ戒ヲ護ルコソ、神慮ニ叶フ事ナレ。

(大系本、七九頁)

と説いて、本地垂迹、神明即仏だからといって、神明だけに執着した信仰態度を否定しているのである。そしてこのような本地垂迹説を承けて、第一〇条「浄土門ノ人神明ヲ輕テ罰ヲ蒙ル事」では、

凡念仏宗ハ、濁世相応ノ要門、凡夫出離ノ直路也。実ニ日出度キ宗ナル程ニ、余行余善ヲ撰ミ、自余ヲ仏菩薩神明マデモ輕メ、諸大乘ノ法門ヲモ謗ズル事アリ。此俗諸行往生ヲ許サヌ流ニテ、事外ニ心エズシテ、余ノ仏菩薩ヲモ輕メケル人ナリ。

況ヤ法華ヲ誦シ、眞言ヲ唱ヘテ、往生ノ素懷ヲ遂事、經文トイヒ、伝記トイヒ、三国ノ先蹤是レ多シ。抑テ大乘ノ功能ヲ失、謗リテ、余教ノ利益ヲ蔑ロニスル事、然ルベカラズ。サレバ只仰テ本願ヲ信ジ、ネンゴロニ念仏ノ功ヲ入テ、余行ヲ謗リ余ノ仏菩薩神明ヲ輕シムル事アルベカラズ。此人ノ臨終ニ其答見エタリ。

是皆仏体ノ源ヲ知ラズ、差別ノ執心深キ故也。

(大系本、八四〜八七頁の取意)

と、専修念仏に固執する或る浄土教の僧の説話を譬えとして採りあげている。これは浄土教の念仏の法門は眞に西方浄土往生の直路であるが、専修ということに執着するあまり、神明や他宗を軽んじて敬うことがないため、浄土往生を遂げられなかつた浄土教の僧の話であり、ここでの教訓は、自宗に対する執着心によって神明即仏

という本質・真実が見えず、そのため悪果を得てしまうものである。それ故、この条を「是皆仏体ノ源ヲ知ラズ、差別ノ執心深キ故也」と結んで、執着心・偏執を離れるべきことを主張しているのである。

(二) 第二・三・四卷へ諸仏菩薩と諸宗の優劣

次に第二卷は、諸仏菩薩が我々衆生にもたらす利益・力に優劣が無いことを明かすもので、その第八条「彌勒行者事」に、

又、彌勒ハ胎藏ノ大日、弥陀ハ金剛ノ大日ト習フ事モアリ。兩部ノ大日、実ニハ理智不二ノ故ニ、平等一體也。又、三十七尊ノ中ニ、西方ノ無量寿ノ四親近ノ菩薩ノ中ニ、法利因語ハ次ノ如ク、觀音・文殊・彌勒・淨名也。旁弥陀・〔彌勒〕、師弟・因果ノ差別也。勝劣アル〔ベカラズ〕。但密教ノ習ハ、因ヲ実トシ、果ヲ權トス。因位ノ彌勒、果位ノ弥陀ニ過ベカラズトイヘドモ、此義ノ心ハ、彌勒ハ在家ノ俗形ヲ改ズシテ本有不改ノ故ニ、必ズシモ欲界ノ外ニ淨土ヲシメ給ハズ。自証ノ極マル所、イヅクモ法界宮ニ非ズトイフ事ナシ。自性清淨、本不生際ニ、取捨ノ心ナク、道俗ノ形ナシ。只世俗ノ風儀ニ任セテ、同類ノ衆生ヲリス。

(大系本、一一八頁)

とあるように、真言密教の曼荼羅思想により、諸仏菩薩は全て大日如来に収斂されてしまうので、そこに何らの優劣など無いことを示すのである。

づづく第三卷と第四卷は、諸宗の優劣・是非・浅深の諍論を止めるべきことを明かしているのであるが、第三卷と第四卷との差異は、第三卷が所説の法・教理に視点を置いているのに対し、第四卷が、法を説く、能説の人である僧侶に視点を置いて説いていることが指摘できる。そこで、第四卷の第一条「無言上人事」を見てみると、

抑法相三論ハ、中天ヨリ始リテ、護法・清辨、唯識・唯境ノ諍堅シテ、門徒、宗ヲ分テル事ヲ、天台ノ祖師釈云、「天親・龍樹、内鑿冷然、外適時機、各據一門」ト云リ。法相ノ祖師天親、三論祖師龍樹、「内」証ハ皆真如ノ一理ヲ通達シ、外用ノ時、機ヲ引入スル方便、或ハ唯識無境トイヒ、或唯境無識ト云。有門・空門、時ニ隨而定レル準ナシ。然ニ末学、仏法ノ源底ニクラクシテ、是非偏執ノ過ヲ致ス由ヲ釈シ玉ヘリ。

諸宗ノ論ハ、一往他宗ノ劣ナル處ヲ見テ、我家ノ勝タル義ヲ以テソシル。相撲ヲ取ニ、吾ガツヨキ所ヲ以テ、人ノヨハキ所ニ当ト云如シ。只有縁ノ機ニ信心ヲ深セン為也。謗法セヨトニアラジ。求那拔摩三藏ノ云ク、「諸仏各異端、修行理無一。偏執有是非。達者無違諍云云」。寔ニ偏執是非ハ、仏祖ノ意ニ不可叶。

(大系本、一七二―一七三頁の取意)

とあることから、無住は、三論宗にしる法相宗にしるその祖師と呼ばれる僧に至っては、真理に通達しているので、衆生に向つて発せられる法は一見異なっているように見えるが、それは衆生を真理、覚りの境界へと導く方便であつて、そこに何らの偏執はないとする。それ故、我々末学の者たちが、自宗の教えに偏執するあまり、他宗を誹謗したり、教えの是非優劣を論ずることは、仏や祖師の本意ではないことを主張する。

そしてこの条の他に、第四巻の第七条「臨終ニ執心ヲソルベキ事」(大系本、一九〇頁)や、第四巻の第九条「道心タラム人執心ノゾクベキ事」(大系本、一九三頁)と題された説話があることから、この第三、第四巻の中で無住は、如何に執着・執心の害が大きく、執心を離れるべきことを繰り返し主張しているのである。

(三) 第五卷 〈和歌即陀羅尼観〉

最後に第五巻は、和歌は日本における真言・陀羅尼であるとすることを宣説するものである。すなわち、第五

巻本の第一二条「和歌ノ道フカキ理アル事」には、

和歌ノ一道ヲ思トク〔二〕、散乱鹿動ノ心ヲヤメ、寂然淨閑ナル徳アリ。又言ス〔ク〕ナクシテ、心ヲフクメリ。総持ノ義アルベシ。総持ト云ハ、即陀羅尼ナリ。我朝ノ神ハ、仏菩薩ノ垂跡、応身〔ノ〕随一ナリ。素盞雄尊、スデニ「出雲八重ガキ」ノ三十一字ノ詠ヲ始メ給ヘリ。仏ノコバニ、コトナルベカラズ。天竺ノ陀羅尼モ、只其国ノ人ノ詞也。仏コレヲモテ、陀羅尼ヲ説キ給ヘリ。此故ニ、一行禪師ノ大日経疏ニモ、「隨方ノコトバ、皆陀羅尼」ト云ヘリ。仏モシ我国ニ出給ハバ、只和国ノ詞以テ、陀羅尼トシ給ベシ。大日経ノ三十一品モ、自ラ三十一字ニアタレリ。世間出世ノ道理ヲ、三十一字ノ中ニツツミテ、仏菩薩ノ応モアリ、神明人類ノ感ノアリ。彼陀羅尼モ、天竺ノ世俗ノ言ナレドモ、〔陀羅尼ニ〕モチイテ、コレ〔ヲ〕タモテバ、滅罪ノ徳、拔苦ノ用アリ。日本ノ和歌モ、ヨノツネノ詞ナレドモ、和歌ニモチイテ思ヲノブレバ、必感アリ。マシテ仏法ノ心ヲフクメラシムルハ、無疑陀羅尼ナルベシ。

（大系本、一三二―一三三頁の取意）

と説いて、和歌には、散乱心などの心の働きを止めるという徳があり、また、一首の中に多くの義、特に仏の説を包摂することができることによって、まさに和歌は陀羅尼そのものであると無住は主張するのである。このことはまた、先に「第一巻」の項でも述べたように、空間的には印度と日本とを同位に置き、時間的にはスサノオと『大日経』、仏教弘通以前の神明とそれ以後の仏とを同置せしめるという、無住独特の歴史観によって、和歌即陀羅尼ということを成立せしめているのである。

（四）執心・偏執を離れるべきこと

以上、第一巻から第五巻までを、足早に概観してきたのであるが、その全体に通底していたのは、「執心」「偏

「執」を離れるべきことであると思われる。すなわち、本地垂迹説を説く第一巻には、

・ 只今生ノ榮花ヲノミ思ヒ、福德壽命ヲ祈、執心深シテ物ヲ忌、都道念ナカラン（八）、神意ニモ叶ベカラズ。（大系本、六一頁）

・ 是皆仏体ノ源ヲ知ラズ、差別ノ執心深キ故也。（大系本、八七頁）

諸仏菩薩を優劣することの否定を説く第二巻には、

・ 末学ミダリニ偏執シテ余宗ヲ謗ル、由ナキ事也。（大系本、一二二頁）

諸仏菩薩を優劣することの否定を説く第四巻には、

・ 稀ニ学スル人モ、只偏執ノ心アレドモ、薰修ノ功ウスシ。是我相深シテ嫉妬ノ心ヲサシハサム故也。須是非偏執ヲ止テ、修行ヲ専ニスベシ。（大系本、一七〇頁）

・ 然ヲ近代ノ禪門ノ人ノ中ニ、粗教門ヲ軽ス。祖師ノ心ニ背ニヤ。仏祖ノ誠ル處ハ、只文字ノ執心也。教門ノ助観ノ功アルコトヲバ遮セズ。（大系本、一七七頁）

・ 都ハ偏執我慢ヲ存スルハ、小智愚鈍ノイタス所也。広ク教門ヲ学シ、普ク諸宗ヲ窺ル人ノ中ニハ隔ル心ナシ。智者ノ心ヲ学テ、愚人ノ情ニ同ズルコトナク、是非偏執ノ心ヲ止テ、如説修行ノ志ヲハゲムベシ。（大系本、一八四頁）

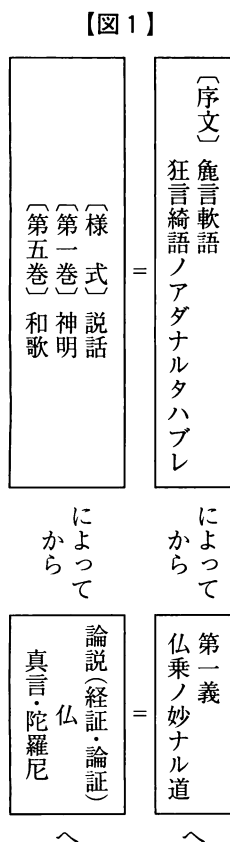
〔文中の傍点は筆者による〕

などであることによつても、各巻の主題を問わず、そこに一貫して宣説されているのは、執着心・偏執を捨離すべきことであつた。

四、『沙石集』の意図と構想

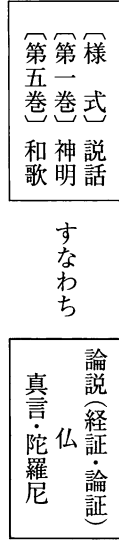
以上、第一巻から第五巻までの内容を概観してきたのであるが、そこに込められた、『沙石集』における無住の意図・構想は、以下のようなことに集約できるものと考ええる。

すなわち、『沙石集』という説話集は、各条において先ず説話を掲げ、次いで説話に對する経証・論証の文を引用しつつ、無住自身の注釈を加えていることが、その特徴となつているのであるが、この特徴が、先の『沙石集』執筆の動機」の項にて触れた、「**龜言軟語**ミナ第一義二歸シ」「**狂言綺語**ノアダナルタハブレヲ縁トシテ、**仏乗ノ妙ナル道**ニ入シ」という序の文と一致することは明白である。そしてこのことを從權入実と言い換えることも可能であろう。そこで、このことに注意しつつ『沙石集』の特徴となつている〈**龜言軟語**・**狂言綺語**ノアダナルタハブレから第一義・**仏乗ノ妙ナル道**へ〉すなわち、〈**説話**から**経論**へ〉という様式である從權入実という観点から第一巻と第五巻とを見るならば、前者では、〈**神明**から**仏**へ〉であり、後者では〈**和歌**から**真言・陀羅尼**・**陀羅尼**へ〉ということが言えよう。(図一)



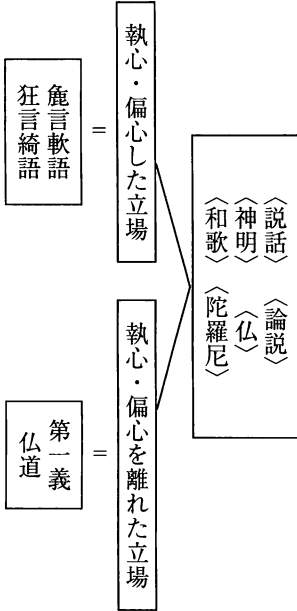
そしてその上で、「《仏意に叶う》ものは、本質として真実であり、仏と同等であるとの認識による無住独自の歴史観によって、説話自体は事実・真実であり、神明は仏の現れであり、和歌は陀羅尼そのものであると解釈されるに至るのである。(図二)

【図2】



そして次の段階では、全体(特に第二・三・四巻において顕著である)に通底している、「執心」「偏執」を離れるべきことは、換言すれば、〈説話〉〈論説〉〈神明〉〈仏〉〈和歌〉〈陀羅尼〉という、五巻の中で説かれた六つの中から各々に「偏執した立場」と「偏執を離れた立場」との二者が関わるということであり、さらにこの二者は、再び「序」の《鹿言軟語》と《第一義》とへと帰結するのである。(図三)

【図3】



これらのことが特に顕著である例を次に掲げて、再度確認しておきたい。すなわち、第五卷本の第一条「学生ノ歌好ミタル事」(大系本、二一九―二二二頁)と、第二二条「和歌ノ道フカキ理アル事」(大系本、二二二―二二五頁)との文にて確認すれば、

・ 諸法実相也。色香中道ナリ。麁言軟語皆帰第一義。和歌ナンゾ必ずシモエラビステン。治生産業悉ク実相
〔二〕ソムカズ

の文によつて、先ず序の(麁言軟語によつて第一義へ)という構造の中に和歌を組み入れ、また、

・ 和歌ノ一道ヲ思トク〔二〕、散乱麁動ノ心ヲヤメ、寂然淨閑ナル徳アリ。又言ス〔ク〕ナクシテ、心ヲフクメリ。総持ノ義アルベシ。総持ト云ハ、即陀羅尼ナリ。

・ 和歌ノ徳、総持ノ義、陀羅尼ト一ニ心ウベシ。

・ 凡狂言綺語ニ、和歌ヲ入ルル事ハ、染歌ト云テ、愛情ニヒカレテ、ヨシナキ色ニソミ、空ノ詞ノカザル故也。聖教ノ理ヲモノベ、無常ノ心ヲモ連テ、世縁俗念ヲウスクシ、名利情執ヲモワスレ、風葉ヲミテ、世上ノアダナル事ヲシリ、雪月ヲ詠ジテ、心中ノ潔理ヲモサトラバ、仏道ニ入媒チ、法門ヲサトルタヨリナルベシ。

等の文によつて、(和歌から陀羅尼へ)ということを示し、次に、

・ 彼陀羅尼モ、天竺ノ世俗ノ言ナレドモ、〔陀羅尼ニ〕モチイテ、コレ〔ヲ〕タモテバ、滅罪ノ徳、抜苦ノ用アリ。日本ノ和歌モ、ヨノツネノ詞ナレドモ、和歌ニモチイテ思ヲノブレバ、必感アリ。マシテ仏法ノ心ヲフクメランハ、無疑陀羅尼ナルベシ。

・ 天竺、漢土、和国、ソノ詞コトナレドモ、其意通ジテ、其益ステニ同ユヘニ、仏ノ教ヒロマリテ、其義門

ヲエテ、利益ムナシカラズ。

・我朝ノ神ハ、仏菩薩ノ垂跡、応身（ノ）随一ナリ。素盞雄尊、スデニ「出雲八重ガキ」ノ三十一字ノ詠ヲ始メ給ヘリ。仏ノコバニ、コトナルベカラズ。

・大日経ノ三十一品モ、自ラ三十一字ニアタレリ。

等の文によつて、和歌は陀羅尼そのものであると解釈されるに至り、さらに、

・綺語ノトガヲ論ゼバ、失ハ人ノ〔染〕汚ノ心ニアリ。聖教トテモ、名聞利養ニ用フル時ハ、皆魔業トナル。コレ人ノトガナリ。依之総持ノ徳ヲ不可失。

として、『沙石集』全体に通底している「執心」「偏執」を離れるべきことを述べて、再び序の文へと帰結せしめるのである。

この一連の流れ（図一から図三に至る）は、すなわち『沙石集』の構想は、まさに行者が衆生から仏へと成る道歩み、その後、民衆に対して説法・教化を自分の言葉で行い始めるといふ過程そのものを示すことにあつたのではないだろうか。

五、まとめにかえて―邪命説法―

最後にまとめにかえて、第六卷に説かれている説法のあり方について、簡単に触れておくことにする。第六卷の第一七条「有所得説法事」に、

邪命説法ト云名目ハ、仏藏経ニ出タリ。有所得トモイヘリ。同事也。世間ノ人ハ、有所得ト云ハ、布施ヲ望テスル説法ト思ヘリ。然ニ経ノ中ニハ、諸法実相ヲ不知シテ、有為ノ法ヲ説テ、無相ノ理ヲ不説ハ、邪命

ノ説法也。斯ル説法ハ、日夜二十悪ヲ造ル物ヨリモ重キ罪也。十悪ヲ造ル者ヲバ、人コレヲ師トセズ。其身共隨ト云ヘドモ、人ヲ引テヲトス事ナシ。有所得ノ説法ハ、人ヲシテ生死ノ業ヲマシ、実相ノ理ニトラザカラ〔シ〕ムト云ヘリ。マシテ布施ノ希望ハ名利ノ為ナリ。云ニタラズ。
(大系本、二二八六頁)

諸法実相也。色香中道ナリ。麁言軟語皆歸第一義。和歌ナンゾ必ずシモエラビステン。治生産業悉ク実相
(二) ソムカズ。
(大系本、二二四頁)

と解釈する。すなわち無住のいう諸法実相とは、麁言軟語が皆第一義に帰着することと同義であるとし、それ故、和歌すなわち陀羅尼となるのであり、さらにいえば、無住の持つ独特な歴史観と曼荼羅観とによって、説話は単なる言い伝えではなく、事実として受け止められるに至ったのである。

註

(1) 一例として、田中久夫氏が「日本宗教の現世利益」の中の「旧仏教と現世利益」の論致の中で論じていることに、軌を一にする。

(2) 無住は、師事した僧や住持した寺院が禅宗であるため、一般的には禅僧であると認識されているが、東寺や醍醐において修学しており、無住のよって立つ教理(曼荼羅思想等)は極めて真言密教的事であること等によって、ここでは敢えて「密教僧」とした。

(3) 以下は、これを略し「体系本」と表記する。

(4) 渡辺綱也『沙石集』「解説」(大系本、一一〇―二〇頁)等による。

(5) 註(4)に同じ。

(6) 各巻の内容については、片岡了『沙石集の構造』(法蔵館、二〇〇一年二月)の第一部、第一章、第二節「『沙石集』の構成」に詳しく説かれている。特に第一巻から第五巻までについては、片岡了氏は「なおこの、巻一から巻五の配列は、言い換えれば次のように捉えられる。すなわち、巻

一、神明論 卷二、仏・菩薩論 卷三、仏法論 卷四、僧 参考文献

侶論 卷五、陀羅尼論 という順番である」〔沙石集の構造〕(岩波書店「日本古典文学大系」第八五卷、一九六六年五月)

注「沙石集」〔解説〕「二二〇―二二三頁、大隅和雄」〔中世思想史への構想〕「一三八―一四〇頁にも、各巻の概略が説かれて

いる。片岡了「沙石集の構造」(法蔵館、二〇〇一年二月) 大隅和雄「中世思想史への構想」〔中世仏教の諸相〕及び「弱者

(7) 片岡氏は「沙石集の構造」(二二二頁)の中で、この「浄

土門ノ人神明ヲ軽テ罰ヲ蒙ル事」の説話を、浄土教の専修による神祇不拜批判が主題であるとしている。

の人間洞察・無住一円」〔沙石集〕」(名著刊行会、一九八四年十月)

〈キーワード〉和歌即陀羅尼、偏執、諸法実相、説話